

子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について  
～年長児を対象とした共分散構造分析による因果関係モデルの構築～

長谷川 勝 一

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第64号抜刷）

## 子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について ～年長児を対象とした共分散構造分析による因果関係モデルの構築～

Correlations between Children's Group Play and Their Exercise Capacity, Behavioral Traits and Parental Attitudes towards Child Rearing:  
Construction of Causal Relation Model by Covariance Structure Analysis for Five-Year-Old Children in a Preschool

長谷川 勝 一<sup>†</sup>

### 概要（抄録）

本研究は、幼児期の群れ遊びと運動能力、行動特性および養育態度との関係を明らかにするため、関連する項目間の因果関係モデルの構築を目的とした研究の一環として、年長児を対象とした群れ遊びに関する質問紙調査から抽出された潜在的因子の因子得点と、運動能力や友達の数、行動特性、養育態度との関係を分析し、先行研究で明らかになった年中児の因果関係モデルと比較することで、幼児教育へ示唆を得ることを目的としたものである。先行研究に基づき因子分析によって抽出された「遠心力の因子」「仲間の因子」「従属性の因子」の3つの潜在的因子と、因子との関係性が確認できた項目を用いて、共分散構造分析による群れ遊びの因果関係モデルを作成し、かつ年中児のモデルと比較した。

その結果、年長児では年中児と同様に、群れ遊びにおける友達の数と仲間の存在が重要であり、群れ遊びの潜在的因子のうち「仲間の因子」が運動能力に影響を与えている一方で、「従属性の因子」や「遠心力の因子」が、教師が評価する幼児の行動特性に影響を与えていることを確認した。また、保護者の養育態度からの影響は年長児において確認できず、反対に「従属性の因子」が保護者の養育態度に影響を与えていることを確認した。

---

キーワード：群れ遊び、運動能力、行動特性、養育態度、共分散構造分析

---

### 研究の目的

群れ遊びとは、かつて家庭や地域内で行われていた、「この指生まれ」から始まる、三々五々に群れて遊ぶ子どもの活動であり、従来は「伝承遊び」や「軒下遊び」と呼ばれていたものである<sup>1)</sup>。原田は、群れ遊びとは「子どもの発達には自分の体を自分で動かす運動遊びだけではなく、他の子によって動かされる多様な動きと、精神的活動がある楽しい群れ遊びが必要である」<sup>2)</sup>「群れの熱中活動が継続されるためには、ルールの遵守、協力、共同、思いやり、慈しみ、譲りあい、忍耐、興奮の抑制、などが不可欠で、このような能力は群れの熱中活動によって助長される」<sup>3)</sup>と

定義している。群れ遊びは、自分の体を自分で動かし、一定のルールで特定の遊びをする運動遊びとは異なるものであり、群れ遊びには、遊びに没頭できる自由な「時間」「空間」「仲間」と、遊べる雰囲気である「間（空気）」が重要だとされる<sup>4) 5) 6)</sup>。

かつての日本では、兄弟姉妹や隣近所の仲間による子どもたちだけの群れ集団が形成され、そこでの群れ遊びが日常における子どもたちの遊びの中心となっていた。群れ遊びは、子どもたちが自主性・自立性を重視した活動の中で自己の能力を発揮、獲得し、発達に必要な経験を重ね、彼らの発達を総合的に促していた<sup>7) 8)</sup>。

ところが近年、少子化や生活環境の変化、あるいは大人の意識の変化を原因として、子どもたちだけの群れ集団が自然発生的に成立しなくなった側面がある。この結果、家庭内や地域内での「群れ遊び」「伝承遊び」「軒下遊び」が消失し、遊べない、遊ばない、遊ぼうとしない子どもの増加が指摘されて久しい<sup>9)</sup>。

長谷川は、現代において家庭や地域に比較して子どもの群れ集団を形成しやすい幼稚園で行われる自由遊びに注目し、自由遊びの時間に群れ遊びの導入・推進を行い<sup>10)</sup>、群れ遊び活動と子どもの発達の関連性を可視化してきた<sup>11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21)</sup>。

これまでの先行研究として、長谷川は園内での群れ遊びに関する状況を知るため、ルールがある遊びや、仲間との相互協力体制を必要とする活動が発展しやすい年長児を対象として、群れ遊びの様子に関する18項目の質問と友人数を問う調査項目を自作し、担任に対して5件法で回答を求めた<sup>11)</sup>。この調査結果から群れ遊びに関する「遠心力の因子」「向心力の因子」「従属性の因子」「仲間の因子」「一人遊びの因子」の5つの潜在的因子を抽出し<sup>13)</sup>、各因子を取り巻く因果関係モデルを検証したところ、年長児においては「向心力の因子」「遠心力の因子」「仲間の因子」が相互に影響を与え、群れ遊び活動を活性化させる因子として機能していることを明らかにした<sup>15)</sup>。このうち、「遠心力の因子」は「自分の言い分を押し通す」「マイルールを持ち出す」「遊びの中でトラブルをよく起こす」「他の子に命令することが多い」等の特徴を示しており、一見すると群れ遊びを壊しかねない要素であると判断しがちであるが、この因子は「ルールが明確な遊びを好む」「チームで協力する遊びを好む」「外遊びが好き」「リーダー役になることが多い」特徴を示す「向心力の因子」とは表裏の関係にあることが指摘でき、群れ遊び活動を活性化する「重み(振り子)」として重要な働きを示す要素であることが分かった<sup>13)</sup>。また、「向心力の因子」と、「友達と遊ぶことが好き」「一人で遊ぶのが好き(逆転項目)」「遊ぶ友達はいつも同じである」<sup>22)</sup>特徴を示す「仲間の因子」は、ともに「よく遊ぶ友達の数」と相互に関係があることから、この時

期の幼児にとって友達の数の重要性を指摘する結果となった。

一方で、「他の子に命令されることが多い」「他の子に付いて遊ぶことが多い」等の特徴を示す「従属性の因子」と、「内遊びが好き」「先生にまわりつくことが多い」特徴を示す「一人遊びの因子」は、上記の3因子とは相互にマイナスの影響を与える関係にあり、遊びの中で主体性がもてず、仲間がいない子どもは群れ遊びにも活発に参加できない結果を示した。また、5因子の中で「向心力の因子」のみが運動能力に影響を与え、「仲間の因子」や友達の数からの運動能力への影響が確認できなかったことから、ただ単に友達がいればよいのではなく、特定のルールによって仲間と協力し合う群れ遊びをすることによって、結果として運動能力が向上することが明らかになった。さらに、友達の数は「向心力の因子」に対し因果の関係にないことから、友達の存在が群れ遊びを誘発することもあれば、群れ遊びから友達が作られることも指摘できる結果であった。

長谷川は、同じく年長児を対象として、群れ遊びに関する潜在的因子と、教師が評価した行動特性との関係を分析したが<sup>16)</sup>、子どもの快活さを示す「ほがらか指数」と、物事に対して努力する姿勢を示す「がんばり指数」はともに「向心力の因子」から影響を受けており、群れ遊びでの活動が教師による行動特性への評価に影響していることが明らかになった。また、「ほがらか指数」は「従属性の因子」から、「がんばり指数」は「遠心力の因子」から影響を受け、「他の子に命令されることが多い」「他の子に付いて遊ぶことが多い」子や、「遊びの中でトラブルをよく起こす」「自分の言い分を押し通す」「マイルールを持ち出す」「他の子に命令することが多い」子は、教師による行動特性の評価に反映されていることが明らかになった。

長谷川は、年長児に比較して遊びの中で複雑なルールや役割分担などがまだ十分機能しないと考えられる年中児を対象として調査を実施し、群れ遊びに関する質問内容の妥当性等の検証を行ったところ、18項目中9項目が群れ遊びに関する因子構造の説明項目として

選択され、「遠心力の因子」「仲間の因子」「従属性の因子」の3つが潜在的因子として抽出された<sup>19)</sup>。年中児（3因子構造）における「遠心力の因子」は、年長児（5因子構造）と同様に「遊びの中でトラブルをよく起こす」「自分の言い分を押し通す」「マイルールを持ち出す」「他の子に命令することが多い」特徴を示し、群れ遊びにおけるトラブルを象徴する潜在的因子として確認できたが、年中児（3因子構造）による分析では「向心力の因子」が抽出されず、この因子の特徴を示す項目群が年中児においては群れ遊びの状況を把握する質問項目としては適さないことが分かった。また、年中児（3因子構造）では「一人遊びの因子」は抽出されなかった。しかしながら、群れ遊びに関する質問9項目による因子分析では、新規に調査した年長児においても年中児と同じ3因子構造を示すことが確認できたことから、学年による因果関係モデルの比較をする際には、5因子構造ではなく3因子構造による分析の方が適切であると考えた。

長谷川は、年中児における群れ遊びの因子構造が明らかになったことで、保護者の養育態度が子どもの群れ遊びに関する活動に影響を与えているのではないかという仮説から、年中児を対象として、群れ遊びに関する3因子構造の潜在的因子と、養育態度および保護者が評価した行動特性を判定することが可能な親子関係診断検査<sup>23)</sup>（以下「IB式MP親子関係診断検査」）の結果との関係を確認する因果関係モデルを作成した<sup>20)</sup><sup>21)</sup>。その結果、年中児においては、友達の数が「仲間の因子」に、その「仲間の因子」が運動能力に、それぞれ影響を与え、友達の数が増えることで群れ遊びが活発化し、活発化した群れ遊びによって運動能力が向上することを確認した。また、「仲間の因子」と「従属性の因子」が「ほがらか指数」に、「遠心力の因子」が「がんばり指数」に影響を与え、群れ遊びの潜在的因子が教師による子どもの行動特性評価に影響を与えていることを明らかにした。

一方、保護者の養育態度が子どもの群れ遊びに影響を与えているのではないかという仮説には、父親的でしつこく重視した養育態度を示す「きびしさ指数」が

「従属性の因子」に対して影響を与えていることを確認した。つまり年中児において、厳しすぎる養育態度は、群れ遊びにおける子どもの主体性や積極性を損ない、結果として萎縮した行動特性を育むと考えることができ、養育態度が群れ遊びに影響を与えているといえる。また、保護者が評価した、子どもが努力し頑張る姿勢を示す「がんばり親指数」は友達の数に影響を与えていたことから、保護者が子どもの努力を認めることで彼らの自信につながり、他者への積極的な関わりが持てるようになることで友達の数が増えることを伺える結果となった。

一方で、保護者の母親的で過保護・過干渉な養育態度を示す「やさしさ指数」が「がんばり親指数」に影響を与え、甘やかしの要素が子どものがんばりを損なうことや、「がんばり親指数」が「きびしさ指数」に影響を与えていることから、子どもが努力していると保護者が認識することで、保護者が甘やかしの要素を抑えることなど、子どもの行動特性が保護者の養育態度に影響を与えていることも伺えた。

以上のように、3因子構造の因子分析モデルを用いた共分散構造分析により、年中児においても友達の存在が重要であり、群れ遊びの潜在的因子が運動能力に影響を与えていること、養育態度や保護者が評価する行動特性が群れ遊びや友達の数に影響を示すことを確認したが、年長児においてはどのような関係性を示すのであろうか。年中児のモデルとの比較を考慮した際に、前述の通り、5因子構造ではなく3因子構造による因子分析モデルを用いた因果関係モデルを検討することが適切であることから、今回の研究では、平成22（2010）年の調査<sup>15)</sup>とは異なる、平成24（2012）年から平成25（2013）年にかけて実施した調査<sup>17)</sup>をもとに、年長児に対して実施した3因子構造の因子分析モデル<sup>19)</sup>を用いて、共分散構造分析による群れ遊びの因果関係モデルを構築する。同時に、先行研究<sup>21)</sup>における年中児の結果と比較することで、幼児期の群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について新たな知見を得て、幼児教育への示唆を得ることを目的とする。

## 研究方法

研究対象：調査対象児は、岡山県北部T市内の私立幼稚園の年長児（5歳児クラス）261名であった。なお、調査対象児は先行研究<sup>17) 19)</sup>において分析対象としたものと同一である。

調査時期：調査時期は、平成25（2013）年6月、平成26（2014）年6月、平成27（2015）年6月にかけて、合計で3回の調査を実施した。

調査項目：調査項目は、生年月日、性別、身長、運動能力に関する測定項目（20メートル走、立ち幅跳び、テニスボール投げ）、行動特性項目（14項目）、群れ遊びと友人数に関する質問紙調査（19項目）、IB式MP親子関係診断検査（35項目）であった。

調査の手続き：体格測定項目である身長と、運動能力に関する測定項目である20メートル走、立ち幅跳び、硬式テニスボール投げについては、原田の測定法<sup>24)</sup>により、担任を含む幼稚園職員が測定を行った。行動特性調査は原田の調査用紙<sup>25)</sup>を、群れ遊びと友人数に関する質問紙調査は先行研究から自作したもの<sup>11)</sup>を使用し、園児の担任にそれぞれの調査用紙を配布して、園児一人ひとりに対する回答を依頼した。親子関係診断検査については、適性科学センターの「IB式MP親子関係診断検査」<sup>23)</sup>を用いて、保護者に調査用紙を配布し、園児に対する回答を依頼し、担任を通じて回収した。

倫理的配慮：調査対象園児の保護者に対して、事前に書面にて、一連の調査が研究の目的で行われ、それ以外の目的には利用されないこと等を説明した。事情があり調査に協力できないと保護者が判断する場合は調査園に申し出る旨も周知した上で、回答の理解を得た。分析に使用したデータは全て匿名化された。

データ処理：群れ遊びの因果関係モデルを構築するにあたって、年中児を対象とした先行研究<sup>20) 21)</sup>と同様

に、以下の処理を行った。

運動能力の評価点は原田の重回帰評価法<sup>26) 27)</sup>を用い、運動能力に関する測定項目は月齢と身長による重回帰評価を、それぞれ-3から+3の7段階の評価点として算出した。その上で、運動能力に関する各評価点を合計し、「運動能力合計点」とした。なお、調査対象児261名のうち、調査データに欠損があった1名については共分散構造分析の対象から除外した。

行動特性は先行研究<sup>16) 18)</sup>と同様に、14項目のうち所定の7項目ずつからA得点（がんばり指数）、B得点（ほがらか指数）を算出し、量的変数として扱った。

調査対象児における、群れ遊びと友人数に関する質問紙の調査項目<sup>11)</sup>は、担任が評価し回答した。園内での自由遊び中における子どもの様子に関するもの18項目については、「当てはまらないもの」から「よく当てはまるもの」までの5段階とし、それぞれ1から5の数値に変換した。友人数「いつもよく遊ぶ友達の数は平均して何人ですか？」の設問については、「0人」から「5人以上」の6段階とした。いずれの項目についても、「不明」の回答選択肢を設け、「不明」の回答があった場合には欠損値の扱いとしたが、欠損値はなかった。

群れ遊びに関する潜在的因子を抽出するための因子分析は、群れ遊びに関する調査の結果が得られた261名の標本をもとに、最尤法によるプロマックス回転を用いた。固有値1以上で因子を抽出し、3因子構造（遠心力の因子、仲間の因子、従属性の因子）であることが確認されたため、本研究ではこの3因子を使用した<sup>19)</sup>。ただし、第2因子の「仲間の因子」については、年中児における「仲間の因子」は「友達と遊ぶのが好き」「遊ぶ友達はいつも同じである」に正の因子負荷を示し、「一人で遊ぶのが好き」に対して負の因子負荷を示したが、年長児においては「一人で遊ぶのが好き」に正の因子負荷を示し、「友達と遊ぶのが好き」「遊ぶ友達はいつも同じである」に負の因子負荷を示したことから、因子得点を取得後、因子得点に対する逆転処理をした上で、相関係数分析ならびに共分散構造分析に用いた。



IB式MP親子関係診断検査は、各質問項目に対して「はい」「?」「いいえ」の3件法で回答を求め、評価基準から得点化した<sup>23)</sup>。保護者が評価した子どもの行動特性については、先行研究<sup>18)</sup>と同じく、H得点（ほがらか親指数）、G得点（がんばり親指数）を算出し、量的変数として扱った。また、保護者の養育態度についても、母親的なやさしさを示すM得点（やさしさ指数）と、しつけなどの父親的な厳しさを示すP得点（きびしさ指数）、子どもへの接し方に関する理想や見栄を示すS得点（心の構え指数）を算出し、分析に用いた。親子関係診断検査に関しては、調査対象児261名のうち、結果が得られた131名を分析の対象とした。

### 結果とその考察

記述統計：群れ遊びに関する調査結果が得られた261名の各調査項目およびデータ処理によって算出された

各得点項目の人数、平均値、標準偏差、最小値、最大値、歪度、尖度の結果を表1に示す。ただし、運動能力合計点については欠損があったため260名の集計であり、親子関係診断検査に関する項目についてはデータが得られた131名の集計となっている。

運動能力のデータが得られた260名のうち、親子関係診断検査のデータが得られた130名を共分散構造分析の対象とした。対象園児の人数、平均値、標準偏差、最小値、最大値、歪度、尖度の結果を表2に示す。

仮説モデルの作成：全ての調査項目の結果が得られた130名を対象として、分析項目間の関係をPearsonの相関係数を用いて検討した。両側検定による統計上の有意水準を5%とした。各調査項目および各得点項目間の相関分析を表3に示す。そして、有意な関係が得られた項目から共分散構造分析で用いる仮説モデルを

表1 各調査項目および各得点項目の人数、平均値、標準偏差、最小値、最大値、歪度、尖度

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
群れ遊び 因子1 遠心力の因子	261	-1.534	2.624	0.000	0.959	0.245	-0.636
因子2 仲間の因子	261	-1.452	3.370	0.000	0.936	0.351	-0.066
因子3 従属性の因子	261	-2.023	2.372	0.000	0.858	-0.046	-0.229
運動能力合計点	260	-9.000	5.000	-0.485	2.198	-0.270	0.689
よく遊ぶ友達の数	261	0.000	5.000	3.605	1.020	-0.639	0.605
行動特性 A得点（がんばり指数）	261	1.000	14.000	10.011	2.795	-0.702	-0.247
B得点（ほがらか指数）	261	-1.000	11.000	7.092	2.752	-0.446	-0.535
親子関係 M得点（やさしさ指数）	131	0.000	12.000	6.298	2.811	0.059	-0.530
P得点（きびしさ指数）	131	0.000	14.000	7.740	2.844	-0.165	-0.269
H得点（ほがらか親指数）	131	3.000	14.000	12.252	1.773	-1.769	5.612
G得点（がんばり親指数）	131	0.000	14.000	7.802	3.850	-0.356	-0.859
S得点（心の構え指数）	131	0.000	10.000	2.191	2.080	1.190	1.332

調査の対象とした参加者全てを含むデータを示している。

表2 共分散構造分析対象園児の各調査項目および各得点項目の人数、平均値、標準偏差、最小値、最大値、歪度、尖度

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
群れ遊び 因子1 遠心力の因子	130	-1.534	2.234	0.109	0.839	0.029	-0.235
因子2 仲間の因子	130	-1.415	2.080	0.070	0.869	-0.144	-0.604
因子3 従属性の因子	130	-1.876	1.820	0.054	0.706	-0.021	0.197
運動能力合計点	130	-7.000	5.000	-0.731	2.184	-0.165	0.328
よく遊ぶ友達の数	130	0.000	5.000	3.462	1.072	-0.588	0.435
行動特性 A得点（がんばり指数）	130	1.000	14.000	10.146	2.785	-0.788	0.051
B得点（ほがらか指数）	130	-1.000	11.000	7.046	2.688	-0.649	0.077
親子関係 M得点（やさしさ指数）	130	0.000	12.000	6.277	2.812	0.075	-0.518
P得点（きびしさ指数）	130	0.000	14.000	7.769	2.835	-0.180	-0.232
H得点（ほがらか親指数）	130	3.000	14.000	12.262	1.776	-1.786	5.653
G得点（がんばり親指数）	130	0.000	14.000	7.815	3.862	-0.366	-0.863
S得点（心の構え指数）	130	0.000	10.000	2.192	2.088	1.184	1.296

群れ遊びに関する調査、運動能力、行動特性、親子関係診断検査の全ての結果が得られた130名のデータを示している。

表3 各調査項目および各得点項目間の相関係数

	因子1	因子2	因子3	運動能力	友達の数	A得点	B得点	M得点	P得点	H得点	G得点	S得点
群れ遊び 因子1 遠心力の因子	1	0.386 (**)	-0.113	-0.081	-0.023	-0.424 (**)	-0.029	0.059	0.064	0.057	-0.110	-0.095
因子2 仲間の因子		1	-0.155	0.281 (**)	0.433 (**)	0.288 (**)	0.132	-0.079	0.125	0.127	0.067	0.177 (*)
因子3 従属性の因子			1	-0.163	-0.400 (**)	-0.343 (**)	-0.353 (**)	0.073	-0.167	-0.243 (**)	-0.317 (**)	-0.210 (*)
運動能力合計点				1	0.317 (**)	0.325 (**)	0.378 (**)	-0.109	0.154	0.195 (*)	0.105	-0.030
よく遊ぶ友達の数					1	0.343 (**)	0.278 (**)	-0.122	0.127	0.184 (*)	0.185 (*)	0.078
行動特性 A得点 (がんばり指数)						1	0.624 (**)	-0.188 (*)	0.004	0.146	0.331 (**)	0.052
B得点 (ほがらか指数)							1	-0.100	0.070	0.260 (**)	0.240 (**)	-0.130
親子関係 M得点 (やさしさ指数)								1	-0.088	-0.055	-0.223 (*)	0.173 (*)
P得点 (きびしさ指数)									1	0.149	0.111	0.055
H得点 (ほがらか親指数)										1	0.363 (**)	0.237 (**)
G得点 (がんばり親指数)											1	0.061
S得点 (心の構え指数)												1

\*\* p<0.01 \* p<0.05

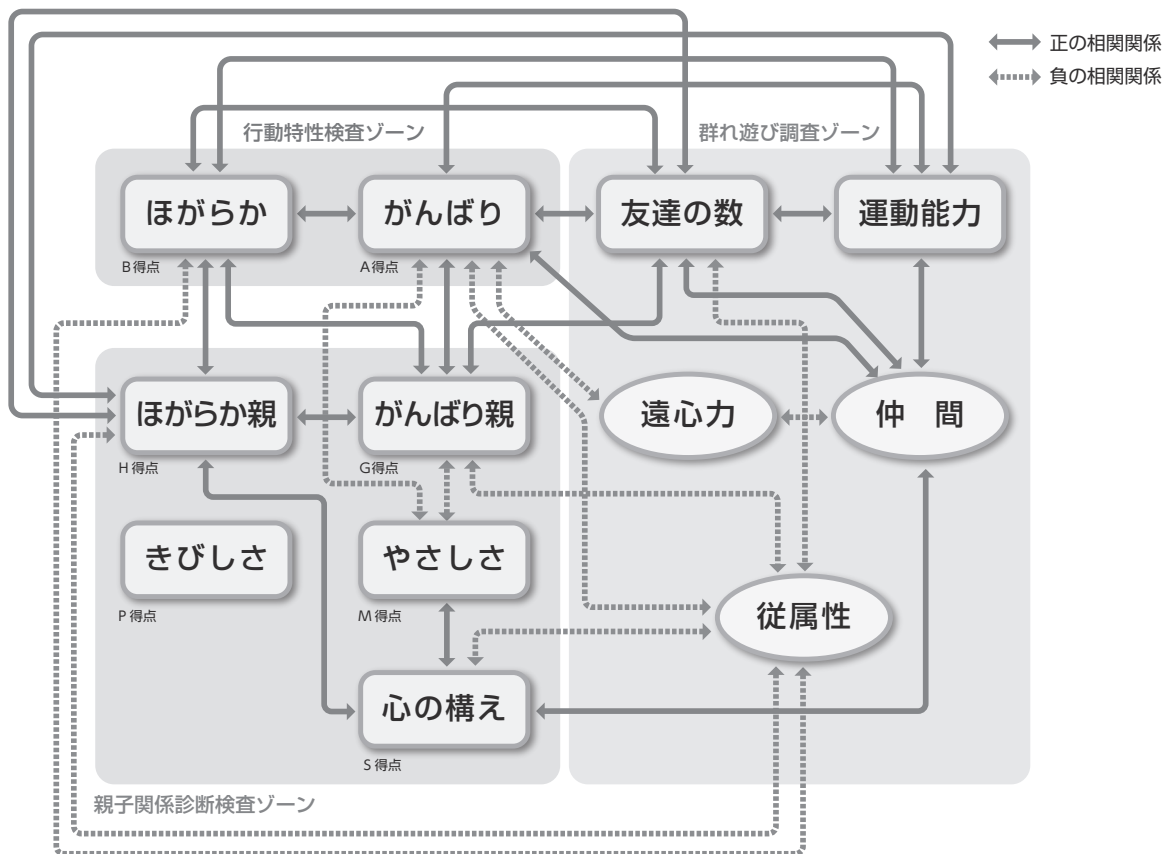


図1 共分散構造分析の仮説モデル

作成したものを図1に示す。

採択モデル：仮説モデルを元を実施した共分散構造分析の結果、採択したモデルは、 $\chi^2$ 値 = 115.469(df=43)、RMR=0.714、GFI=0.859、AGFI

=0.784、RMSEA=0.114、AIC=161.469を示した。RMSEAが0.1以上であり、モデルとしては当てはまりがよい状態とはいえないが、GFI、AGFIの数値も高く、仮説モデルから検討した中では最もAICも低かった。また、先行研究における年中児の結果<sup>21)</sup>と

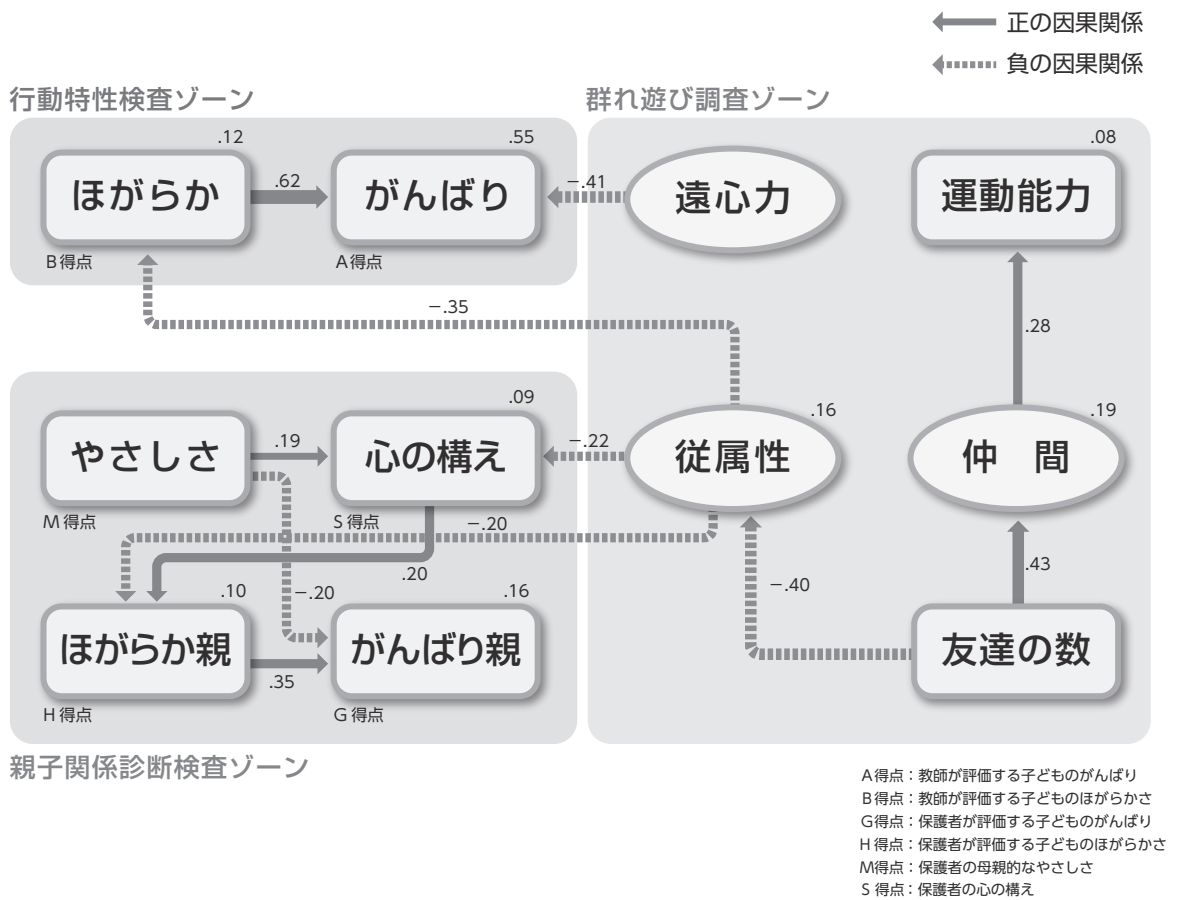


図2 共分散構造分析の採択モデル

もモデルの構成がよく合致しているため、本研究での共分散構造分析におけるモデルとして採択した。モデルとして採択したものを図2に示す。項目間の数値は標準化推定値を示し、変数の右上に記載されている数値は重相関係数の平方（重決定係数： $R^2$ ）である。なお、すべての項目間の係数（推定値）は有意水準に到達している。

年中児のモデルとの比較：今回の結果は年長児を対象としたものであるが、「友達の数」が群れ遊びに必須な友達の存在を示す潜在的因子「仲間の因子」に影響を与え（0.43）、その「仲間の因子」が運動能力合計点に影響を与えている（0.28）。このことは年中児を対象とした先行研究の分析結果と同様であり、学年を

問わず、友達の存在が群れ遊び活動に影響を与え、群れ遊び活動が運動能力の向上に影響しているといえる。参考として、先行研究<sup>21)</sup>における年中児の共分散構造分析の採択モデルを図3に示す。

また、群れ遊びにおけるトラブルを誘発する要因となる「遠心力の因子」は運動能力と関係が見られないが、教師が評価する子どもの行動特性であるA得点（がんばり指数）にマイナスの影響（-0.41）を与えているのは年中児の結果と同様である。あわせて、群れ遊びでの活動における子どもの依存性を示す「従属性の因子」が、教師が評価する子どもの行動特性であるB得点（ほがらか指数）にマイナスの影響（-0.35）を与えているのも年中児の結果と同様であった。

年中児での分析と比較して異なるのは、「仲間の因



← 正の因果関係  
 ←..... 負の因果関係

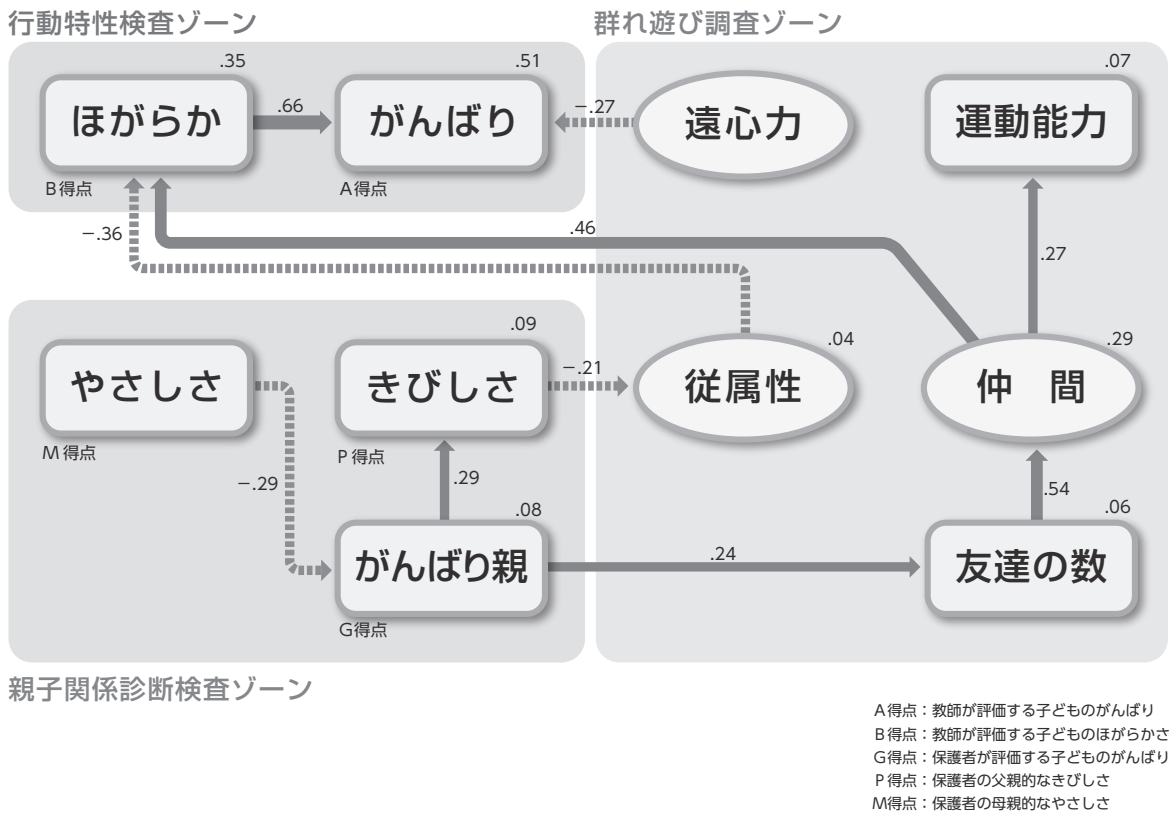


図3 年中児における共分散構造分析の採択モデル（先行研究<sup>21)</sup>より一部修正して掲載）

子」がB得点（ほがらか指数）に対して影響を与えていないことである。教師の評価として、子どもが快活でほがらかであるかどうかということと、群れ遊びでの活動とは、年長児においてはリンクしていないという構造を示している。一方で、B得点（ほがらか指数）がA得点（がんばり指数）に影響を与えている（0.62）のは学年を問わず同様である。年長児ともなれば、友達が多く、群れ遊びで積極的に遊ぶことはいわば当然であって、それが行動特性の評価に影響する訳ではない。しかしながら、群れ遊びでのトラブルや依存的な行動はマイナスとして評価に影響すると考えることができる。

また、「友達の数」が「従属性の因子」にマイナスの影響（-0.40）を与えていることも年中児と異なる

結果である。年長児においては、「他の子に付いて遊ぶことが多い」「他の子に命令されることが多い」を説明項目とする「従属性の因子」の要素は、友達の数が少ないことと関連があり、群れ遊びで主体的に遊べていない子は友達も少ないことが伺える。年中児における「従属性の因子」は保護者のP得点（きびしさ指数）からの影響を受けていたが、年長児においては保護者からの影響ではなく、友達関係の大小から、群れ遊びにおける依存性が影響を受けていることが分かる。

年長児では「従属性の因子」が親子関係診断検査ゾーンとの中継ポイントとして注目される。年中児では前述の通り、保護者の養育態度を示すP得点（きびしさ指数）が「従属性の因子」に対してマイナスの影響（-0.21）を与える関係が指摘されたただけであった

が、年長児ではS得点（心の構え指数）とH得点（ほがらか親指数）にそれぞれマイナスの影響（S得点：-0.22、H得点：-0.20）を与えている。年中児における分析では、S得点、H得点のいずれも共分散構造分析の採択モデルに登場しなかった項目であるが、年長児ではモデルに影響を与える項目として採択された。一方で、保護者のきびしさを示すP得点（きびしさ指数）はモデルに影響を与える項目として採択されなかった。

S得点（心の構え指数）は、「子どもを、うるさいと思ったことはない」「一度も子どもをしかったことがない」「子どもとの約束は、どんなささいな約束でも一度も破ったことはない」「どんなに腹がたっても、子どもにはやさしく接している」「その日の気分で子どもへの接し方が変わったりはしない」「子どものすることについて腹がたったことはない」「どんなときでも、子どもの手本になるような行動をしている」の7項目からなる尺度で、「はい」を選択すれば2点を、「？」（どちらともいえない）を選択すれば1点を、「いいえ」を選択すれば0点を加算するものである。8点以上であれば「理想を高く持ち過ぎているか、自分をより立派に見てもらおうとする傾向がやや強めである」<sup>23)</sup>とされる。この設問については、保護者が、子育てに対して理想を持ち、子どもに対して親（人間）として立派であろうと考えたり、子どもの要求に対して誠実であろうとすることで、若干得点が高くなることは想像できるが、「従属性の因子」がS得点（心の構え指数）にマイナスの影響（-0.22）を与えていることから、群れ遊びにおいて子どもが主体的でなく他者に依存的であれば、保護者の心構えは低くなるといえ、群れ遊びに関する潜在的因子が保護者の養育態度に影響を与えている結果となっている。

親子関係診断検査ゾーンと群れ遊び調査ゾーンの関わりに注目すると、年中児では、保護者の養育態度であるP得点（きびしさ指数）が「従属性の因子」にマイナスの影響を与えていたが、年長児では逆に、子どもの状況を示す「従属性の因子」が親の養育態度にマイナスの影響（-0.22）を与えている。同様に「従属

性の因子」が、保護者が評価する子どもの行動特性であるH得点（ほがらか親指数）にもマイナスの影響（-0.20）を与えており、群れ遊びに関連する潜在的因子が、保護者の養育態度に加えて、保護者が評価する子どもの行動特性にも影響を示しているところが注目すべき点である。

親子関係診断検査ゾーンに配置された項目群の相互関係については、年長児は年中児に比較して複雑な影響を示す形となっている。保護者のやさしさを示すM得点（やさしさ指数）が起点となっているのは年齢を問わず同様であるが、年長児ではM得点（やさしさ指数）がS得点（心の構え指数）に（0.19）、S得点（心の構え指数）がH得点（ほがらか親指数）に（0.20）、そしてH得点（ほがらか親指数）がG得点（がんばり親指数）に（0.35）、それぞれ正の因果関係を示す形となった。保護者の「やさしさ」の中には、子どもを肯定的に受け止め、理解しようとする要素が含まれていると考えられるが、これが、保護者として子どもを認めようとする態度に影響し、子どものほがらかさと頑張る姿勢を誘発している。一方で、M得点（やさしさ指数）はG得点（がんばり親指数）にマイナスの影響（-0.20）を与えていることから、保護者の「やさしさ」の中には「子どもを甘やかす」要素もあり、こちら側は子どもの頑張る姿勢を阻害していることが分かる。

また、年長児の結果で興味深いのは、こうした保護者の養育態度や、保護者が評価する子どもの行動特性が、子どもの群れ遊び活動に大きな影響を与えていない点である。年中児においては、群れ遊びの潜在的因子が保護者の影響を受けていることを伺う結果であったが、年長児では、保護者の養育態度や行動特性への評価が子どもの群れ遊び活動に影響を与えているとはいえず、むしろ、子どものあり方によって保護者が影響を受けている様子を示す結果となった。子どもが群れ遊び集団の中で、自発的あるいは中心になって活躍していない様子が、「子どもを認めたい」と思う保護者の気持ちにブレーキをかけてしまう、あるいは人間として子どもの見本となろうとする姿勢を助長することができない、と理解することが可能なのではなか

ろうか。

今回の結果から、現代における子どもの群れ遊び活動の場であることが期待される幼稚園などでは、「従属性の因子」を構成している「自ら主体的に遊べない」という子どもが発するサインを見逃すことなく、子どもの遊びを活発化させることが肝要である。年長児では友達の数が増えることで「従属性の因子」の要素が低くなる。園側の取り組みとして、友達がいない子どもに友達をどうやって作るかが重要であるが、自由な空間と時間が保障される群れ遊びは友達を作るきっかけとして有効である。友達が増えることで遊びへの関わりが積極化し、運動能力に好ましい影響を与えるとともに、主体的に遊べるようになることが期待できる。

また、子どもが主体的に遊んでいる様子を知った保護者は、人間として見本となるような心構えや、あるいは子どもを認め尊重しようとする態度を育てることができる。すなわち「子どもが親を育てる」親育ちにもつながるといえよう。園内で友達が増え、活発に遊べるようになった子どもの姿を見て、保護者がよい刺激を受け、親子関係の改善につながるのではなかろうか。一方で、教師は主体的に遊べない子どもが発しているサインを見逃すことがないよう、留意すべきであろう。

本研究では、年長児における群れ遊びに関する調査を行い、同時期に調査した年中児の調査から得られた共分散構造分析のモデルと比較しつつ、年長児の群れ遊びが与える影響とその関係を明らかにしようとした。複数学年を対象とした、複数年に渡る調査であったために、同一の学年において独立していない標本は存在しないが、先行研究<sup>19)</sup>で指摘したような標本の独立性の問題については、研究の余地があると考えられる。今後の課題としたい。

## 結論

年長児を対象とした群れ遊び3因子構造の因子分析を元に、潜在的因子と関係が認められた項目から作成した仮説モデルを共分散構造分析により検討した結果、RMSEAの値が十分ではないが、先行研究<sup>21)</sup>に

よる年中児の結果も加味して整合性のあるモデルを得ることができた。すなわち、「友達の数」が「仲間の因子」に影響を与え、その「仲間の因子」が運動能力合計点に影響を与えている点や、「遠心力の因子」が「がんばり指数」に、「従属性の因子」が「ほがらか指数」に影響を与える点などは、学年を問わず同一の構造を示している。また、教師による子どもの行動特性評価は「遠心力の因子」「従属性の因子」からそれぞれマイナスの影響を受けている点も同一である。以上から、年長児においても群れ遊びの潜在的因子が運動能力や行動特性に影響を与えていると考えることができよう。

一方、年中児との比較による差異では、年長児では「友達の数」が主体的に遊べない「従属性の因子」に影響を与えている点や、「仲間の因子」から「ほがらか指数」への影響が存在しない点がある。

また、年長児における保護者の養育態度は、子どもを理解し、認め、子どもの見本になりたいと思う要素が子どもの行動特性評価に好ましい影響を与えているが、「従属性の因子」がそうした態度にマイナスの影響を与えることがわかった。

総じて、年中児と比較して年長児においては、保護者の養育態度が子どもの群れ遊びに直接影響を与えるのではなく、むしろ子どもの様子が保護者の養育態度に影響を与えていることが伺えた。少子化の中で、子どもたちが自由に群れ遊びができる環境が限定される現在、園内での群れ遊び活動はより重要な意味を持っており、教師は、群れ遊びの場における依存性が高い子どもへの配慮や関わりが問われる。

## 註

1. 原田碩三『“群れ遊び”のすすめ』、黎明書房、1990。
2. 原田碩三・徳田泰伸編『保育の実践』9頁、北大路書房、1992。
3. 原田碩三『新版幼児健康学』73～74頁、黎明書房、1997。
4. 原田碩三『“群れ遊び”のすすめ』168頁、黎明書

- 房、1990。
5. 原田碩三『押しくらまんじゅう花いちもんめ』38頁、農文協、1991。
  6. 原田碩三・徳田泰伸編『保育の実践』22頁、北大路書房、1992。
  7. 原田碩三『押しくらまんじゅう花いちもんめ』、農文協、1991。
  8. 原田碩三・徳田泰伸編『保育の実践』、北大路書房、1992。
  9. 原田碩三『新版幼児健康学』黎明書房、1997。
  10. 明星幼稚園・しらゆり幼稚園・美作大学附属幼稚園「調和のとれた心と体の発達を目指して～群れ遊びを通じた取り組み～」平成21年度全日本私立幼稚園連合会中国地区私立幼稚園教育研修会岡山大会、2009。
  11. 拙論「幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第56号、55～63頁、2011。
  12. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力・行動特性の関係について」日本乳幼児教育学会第21回大会、2011。
  13. 拙論「幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について(2)」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第57号、27～34頁、2012。
  14. 拙論「子どもの群れ遊びと行動特性の関係について」日本乳幼児教育学会第22回大会、2012。
  15. 拙論「幼児期の運動能力と群れ遊びの関係について(3)」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第58号、41～45頁、2013。
  16. 拙論「子どもの群れ遊びと行動特性の関係について～共分散構造分析をもとに～」日本乳幼児教育学会第23回大会、2013。
  17. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について～第1次調査結果の集計報告～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第59号、79～91頁、2014。
  18. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について～教師・保護者間の行動特性評価に関する一考察～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第60号、15～23頁、2015。
  19. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について～因果関係モデル構築のための因子抽出の試み～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第61号、7～14頁、2016。
  20. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について～因果関係モデル構築のための仮説モデルの検証～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第62号、55～61頁、2017。
  21. 拙論「子どもの群れ遊びと運動能力、行動特性、養育態度との関係について～共分散構造分析による因果関係モデルの構築～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第63号、9～16頁、2018。
  22. 「仲間の因子」では「友達と遊ぶのが好き」「一人で遊ぶのが好き(逆転項目)」「遊ぶ友達はいつも同じである」の3項目が説明項目として選択されるが、「遊ぶ友達はいつも同じである」ことは、群れ遊びにおいて「交友範囲が狭い」と同義とはならない。幼児期の活発な群れ遊びにおいて、よく遊ぶ特定の仲間がいることは自然であり、交友範囲の広さは「よく遊ぶ友達の数」で把握できる問題であることに留意されたい。幼児の群れ遊びの活動を観察していると、活発的に参加していない子は、あちこちのグループに声をかけて時間をつぶす動きをすることがあり、結果として遊ぶメンバーが固定されていないケースがある。
  23. 適性科学研究センター「IB式MP親子関係診断検査」、1978。
  24. 原田碩三『新版幼児健康学』201～203頁、黎明書房、1997。
  25. 前掲書203～204頁
  26. 原田昭子他「幼児の体格・運動能力の評価改訂について」『教育医学』第44巻4号、629～643頁、1999。
  27. 原田昭子他「WEB上での幼児の体格・運動能力評価・判定」『教育医学』第50巻1号、72～73頁、2004。